

# 第6室 書跡

## 「古今目録抄と朗詠要集」

### N-18 古今目録抄（ここんもくろくしょう）

法隆寺の寺誌や聖徳太子伝に関する秘伝を記したもので、別名「聖徳太子伝私記（しょうとくたいしでんしき）」ともいいます。13世紀前半に法隆寺の僧侶、顕真（けんしん）が上下2巻にまとめました。上巻では師の隆詮（りゅうせん）から伝授された法隆寺や聖徳太子伝の秘伝を記し、下巻では聖徳太子の舎人（とねり）の調使麻呂（ちょうしまろ）に関する伝記と自らが調使麻呂直系の子孫であることを述べています。なお、随所に顕真自身による加筆訂正の跡があります。

### N-20 朗詠要集（ろうえいようしゅう）

藤原公任（きんとう）の『和漢朗詠集』、藤原基俊（もととし）による『新撰朗詠集』などから抜き出した70首を収録します。漢字と片仮名を交えた読み下しを記し、さらに各行の右側に薄墨（うすずみ）で譜（ふ）が付け加えられています。巻末の奥書から、正応5年（1292）3月、聖玄（しょうげん）が琳弘（りんこう）に口伝した譜本と知られます。

## 第6室 染織

### 「—広東綾幡と多彩な幡足—」

染織は広東綾幡残欠を中心に、さまざまな色で染められた幡足を展示します。これらの作品を通じて、古代の寺院を彩った豊かな色彩の世界を感じていただければと思います。

#### N-304-1：広東綾幡残欠（かんとんあやばんざんけつ）

古代の法隆寺で仏教儀式に用いられた「幡（ばん）」。幡とは儀式の場を彩る旗のことで、お堂の内外に多く飾られました。この作品では上部に広東裂（かんとんぎれ）と呼ばれる経緋（たてがすり）の織物を用い、二条の縁は内側と外側で裂の色を替えて変化をつけています。また境目の縁には金銅丸金具が取り付けられており、当初の華やかな造りをうかがわせます。

#### N-308：平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

各色に染められた平組織の絹（平絹）で仕立てられた幡の残欠。現在は下方の1坪と幡足を残すのみですが、幡足はおおむね下端までの完全な長さで残されています。部分的な断片が多い法隆寺裂のなかであって、当初のプロポーションがうかがい知れる貴重な作品です。

#### N-319-19-1：濃緑地大双竜唐草四弁花円文綾幡足残欠（こいみどりじだいそうりゅうからくさしべんかえんもんあやばんそくざんけつ）

絹の綾織物でつくられた幡足の残欠。文様は、大きな円文のなかに、胴をくねらせた勇ましい竜を向き合わせに配し、円文の外側には唐草文と小さな花文をめぐらしています。

#### N-319-47-4：黄地山形文綾幡足残欠（きじやまがたもんあやばんぞくざんけつ）

黄色の地に山形文を織り出した綾の幡足残欠。山形文などの幾何学系の文様は、綾の文様としては単純で比較的簡単に織ることが可能であるため、法隆寺に伝来した作品の中でも古くより製作されたものと考えられます。

#### N-319-61-3,N-319-97：赤地平絹幡足残欠（あかじへいけんばんそくざんけつ）

目がさめるような鮮やかな赤が印象的な幡足残欠。1300年以上の時を経て残欠となっても鮮やかに保たれた色には驚きを覚えます。

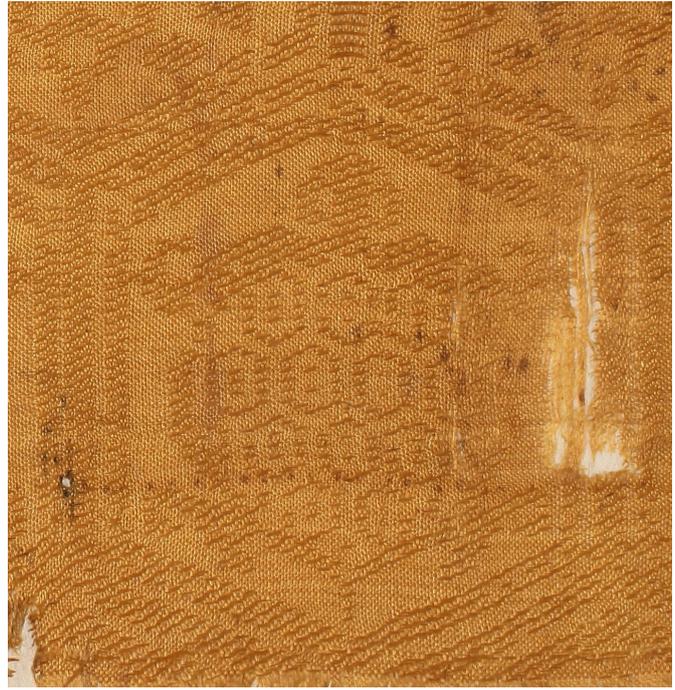
#### N-319-90：黄地亀唐花亀甲繫文綾幡足残欠（きじかめからはなきっこうつなぎもんあやばんそくざんけつ）

亀甲繫文の中に愛嬌のある亀と唐花文を織り出した幡足残欠。中国山東省の龍興寺(りゅうこうじ)跡から出土した菩薩像残欠(北齊～隋 6世紀後半)にも、亀甲繫文に亀を納めた文様

が認められます。



菩薩像残欠(北齊～隋 6世紀後半)  
の亀甲繫文



N-319-90の亀甲繫文

MIHO MUSEUM 編『開館10周年記念特別展 中国・山東省の仏像—飛鳥仏の面影—』より

**N-319-100-1, N-319-129-2 : 紺地平絹幡足残欠 (こんじへいけんぼんそくざんけつ)**

濃い紺色に染められた幡足残欠。法隆寺に伝来した染織品は色の保存が大変によく、いまでも昨日染めたような色彩を保っています。織物自体は朽ちかけようとも強い染め色を残す作品からは、何度も何度も時間をかけて堅牢に染め上げた古代の工人のひたむきな姿が浮かんでくるでしょう。

**N-319-114-2 : 淡紅地亀甲繫文綾幡足残欠 (うすべにじきっこうつなぎもんあやぼんそくざんけつ)**

多重の亀甲形を繋げあわせた文様の綾。現在は淡茶色になっていますが、もとは淡紅色であったと思われます。